

推薦の言葉

こういった本が欲しかったとつくづく思う。

病院のリハ部門での研修では、主として脳血管疾患の急性期から亜急性期の集中的なりハを専門家が提供し、その劇的な効果には目を見張った。また、山村の診療所に在籍するセラピストが利用者の家屋環境や家族への評価を踏まえた訪問リハを懸命に提供する姿にも感銘を受けた。

しかし、一人の家庭医としてリハにどのように関わっていくべきかという点では試行錯誤が続いた。われわれ医師は自らリハに取り組むことは少なく、多くの場合、その役目はセラピストへの「リハオーダー」に集約され、果たしてどう指示すべきか、またどのような人にリハを提供すべきかという大局的視点が求められる。リハを体系的に学んでいない立場でオーダーすることへのある種の罪悪感も感じつつ、家庭医の視点から見える患者の健康問題に関する情報を提供するしかなかった。

本書はまさにそうした居心地の悪さを払拭してくれる良書である。リハの概論や方法論を専門的に論じる書籍は多いが、本書における「リハオーダーと評価」の枠組み、そして、そもそもどんな患者にリハが必要かを実に明瞭に示した点は他にないものであろう。

編集にあたる若林秀隆先生は長年プライマリ・ケア領域でのリハとはどうあるべきかを真摯に模索してきた医師であり、そのサポーターである岡田唯男先生、北西史直先生は生粋の家庭医である。この素晴らしいお三方のコラボで、若手医師に向けてリハを学ぶための道が開かれることを心から喜びたい。

2016年5月

北海道家庭医療学センター
草場鉄周